

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年6月1日現在

機関番号：12606
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2011年度～2012年度
 課題番号：23720074
 研究課題名（和文）
 平田郷陽と人形芸術運動の研究—平田家資料の調査を通して—
 研究課題名（英文）
 Hirata Goyo and Japanese doll art movement: a study of documents owned by Hirata Goyo
 研究代表者
 田中 圭子（TANAKA KEIKO）
 東京芸術大学・大学美術館・学芸研究員
 研究者番号：10571953

研究成果の概要（和文）：

本研究は、人形作家・平田郷陽（1903-1981）の旧蔵資料（写真、作品関連印刷物、文献資料類）および昭和初期に制作された作品の調査を通して彼の戦前期の創作活動の詳細を明らかにするとともに、郷陽が生人形の技法を活用し芸術作品としての人形のあり方を模索するなかで、当時の人形芸術運動とどのように関わっていたかを検証した。また上記の調査結果をもとに、昭和期の人形芸術運動に関するアーカイブを構築し、近代人形工芸史研究に寄与しうる資料の公開に務めた。

研究成果の概要（英文）：

This research investigates old documents owned by Hirata Goyo (such as catalogs, postcards, photographs and documentary records of his works) and examines his works between 1920 and the 1930s. The results of this research have revealed details of his career and works during early Showa period and his involvement in the doll art movement. In addition, an archive of the doll art movement has been created based on the findings, while important documents that could contribute to the study of the history of modern craft and doll craft were also published.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：芸術学・芸術史・芸術一般

科研費の分科・細目：若手研究（B）

キーワード：美術史、芸術諸学、工芸

1. 研究開始当初の背景

人形作家・二代平田郷陽（1903-1981）は、生人形師の家系に生まれ、昭和2年の日米親善交流人形のコンクールでデビューを果たした。その後、展覧会芸術としての人形の表現を追求し昭和11年の改組帝国美術院展覧会に人形作家として初めて入選、以降は作家として日展・日本伝統工芸展を中心に活躍し、昭和30年には人間国宝に認定されるなど、今日の創作人形の基礎を築いた人物として知られる。

研究代表者はこれまで、同志社大学人文科

学研究所の研究会「花・歌・人形—トランスユーラシアの開かれた文化文脈を求めて」の研究員として、日本近代における人形文化の研究を行ってきた。そのなかで、平成20年に同志社大学の特別展示「平田郷陽と青い目の人形」の企画運営に携わり、平田郷陽の戦前期の人形を紹介する機会を得て以来、日米交流史研究の側面でしか語られてこなかった答礼人形と平田郷陽の創作活動について美術史的見地からの検証を行っている。また、平成22年には、サンフランシスコ・アジア美術館で開催された展覧会『Japan's Early

Ambassadors to San Francisco: Diplomats, Artists, and Friendship Dolls, 1860-1927』の企画立案に携わり、平田郷陽の答礼人形の展示を担当、同シンポジウムでは、近代日本人形史に関するアメリカでの調査の成果を発表した。

平田郷陽の創作活動に関する研究は、近代の人形玩具史研究や人形による日米文化交流の一部で取り上げられるものの、近年その緒に就いたばかりで、特に戦前期の活動についてはほとんど調査が行われていなかった。その一因として、同時代の記録など、研究の基盤となる資料の不足が挙げられる。なかでも戦前期の活動に関しては、戦火を免れた非常に限られた文献資料と数点の作品をもとに調査分析を行わなければならない状況にあった。このような研究環境において、平田郷陽旧蔵資料（以下平田家資料）の調査を行うことは、平田郷陽の作家研究だけでなく、近代の人形工芸史研究の発展に大きく寄与するものと期待される。

2. 研究の目的

本研究課題は、平成 23 年の平田郷陽没後 30 年を記念して開催された『平田郷陽の人形展』（佐野美術館、佐倉市立美術館）を期に公開された郷陽旧蔵資料の調査・分析を通して、郷陽の戦前期の創作活動の検証を行なうことを目的とする。主な資料の内容は、写真アルバム及び作品関連の印刷物、書籍、手稿類である。こうした一次資料の調査と並行して、国内外に現存する昭和初期に制作された作品の調査を行なう。

本研究の特色は、平田郷陽の創作活動に関する資料の公開を促進し、研究基盤を構築することにある。今回調査の対象となる資料のうち、ごく一部はこれまで研究者の目に触れる機会があったものの、その大多数はまったくの未公開であった。したがって、この資料を詳しく分析、検討することで、郷陽に関する学術的研究がさらに進むことは間違いない。なかでも、これまで空白となっていた戦前期の作品と人形芸術運動に関する研究への貢献が期待される。

戦前期の作品は現存数も少なく、個人蔵のものを多く含んでおり、その一部は欧米に所在する。郷陽の初期作品を検証する上で、これらの作品を実見することは必須である。なかでも、昭和 2 年にアメリカに贈られた答礼人形の調査研究を行なうことは、日本で目にする機会がなかった作品の詳細を明らかにし、郷陽の人形作家としての出発点となった作品がどのようなものであったかを明示する重要な調査となる。これは、生人形の見世物的表現から脱却し、人形の展覧会芸術としての可能性を拓いた郷陽の活動の検証に不可欠であろう。また、現地調査を行い情報交

換することは、アメリカの所蔵館の作品に対する理解を深め、将来的な作品活用の機会の増加にも寄与すると考えられる。

さらに、調査で得られた多くの作品図版を活用することは、これまで一部の愛好家をのぞき、実際に見る機会が限られていた平田郷陽作品の紹介を国内外で推進して行くことに繋がるだろう。それにより、人形芸術に関する一般の認知を高めると同時に、現代の人形制作者への参考資料としての活用も期待される。

3. 研究の方法

平田家資料の調査は、平田郷陽の著作権者でもある資料の保有者の了解のもと、常に公開可否の確認しながら、以下の手順で行なった。当該資料は大正末から昭和 50 年代までの多岐に及ぶ為、特に戦前期のものを中心に整理を進める。

- (1) 資料の全体像を把握するため、種別、年代ごとに分類して員数を確認、形状を記録する写真を撮影し調書を作成、リストを作成する。
- (2) 写真および作品関連印刷物は、郷陽作品と人形関連の写真図版を中心に整理・デジタル撮影、書き込みなどの資料情報リスト化を行い、官設展覧会に入選する以前の郷陽の創作活動を検証する。
- (3) 在米答礼人形を含む、現存する戦前期の作品の所在調査および作品調査を行い、平田郷陽の作風の変遷について考察を行う。作品調査には、②の写真および図版資料を活用した。また、平田郷陽の作品の修復に立会い、戦前期の人形の製作技法や構造に関する新知見を得た。
- (4) 以上の調査結果の報告を、シンポジウムや展覧会の開催、論文や資料翻刻の刊行、データベースの公開を通して、広く一般に公開する。

4. 研究成果

平成 23 年度から 24 年度にかけて、平田家資料の全体像の把握と、人形芸術運動に関する文献資料・写真資料のデジタル・アーカイブ化を行った。当該資料は全て高精細デジタルカメラで撮影し、写真裏面やアルバム内の書き込みなどの文字情報と連動したデータベースを作成した。整理・撮影が済んだ資料の現物は長期保存のための処置を施し、画像と調書データは研究者向けに公開可能なたちに整理した。これにより、資料情報の開示の利便性を高めるとともに、個人が所有する一次資料を直接閲覧する回数を減らし、貴重資料の劣化を最小限に留めることが可能となった。

アルバムには、写真を趣味としていた郷陽

が自ら撮影した自作の写真および制作の参考資料としたと思われるモデルなどの写真が数多く含まれていた。また、百貨店向けのマネキン人形を制作していた時期の、ディスプレイ風景を記録した写真も多数発見され、昭和初期の郷陽の人形師としての活動が浮彫となった。

印刷物やスクラップ記事、旧蔵書籍類の調査では、当時展覧会場で発売していた絵はがきなどの印刷物が多数残されており、郷陽の創作活動の具体的内容を知る貴重な資料となった。旧蔵書籍のなかでも同時代に刊行された雑誌、画集などは、郷陽がどのようなものを制作の参考にしていたかを知ることが出来る資料であった。これらの作品画像と制作過程に関する調査成果の一部は、佐野美術館『平田郷陽展』のシンポジウムでの講演「生人形から人形芸術へ—平田郷陽の挑戦—」で紹介した。

展覧会関係資料の中には、これまで戦火で失われたと考えられていた人形芸術運動に関する資料が含まれていた。なかでも、昭和3年に結成された人形師による最初の研究・発表団体「白澤会」の昭和3年から昭和9年までの展覧会資料と、昭和11年に結成された帝展進出期成会が発行した広報誌『人形制作』が発見されたのは、近代人形史研究の進展に大きく寄与する発見であった。これらの資料から得られた情報を分析し、「白澤会と平田郷陽 試論」(『人形玩具研究 22号』)で発表したほか、調査で見つかった貴重な資料の一部については翻刻を行い、「資料紹介『人形制作』」(『人形玩具研究 23号』)に掲載した。

また、作品調査では、初期作品の各所蔵者から調査の機会を得ることが出来たほか、平成23年度には『平田郷陽の人形展』の開催により、多くの作品を一度に実見する好機を得た。郷陽のデビューのきっかけとなった在米答礼人形の調査では、本研究課題の事前調査の際にアメリカで新発見された作品の修復と公開にも携わった。修復ではその方針を専門家とともに議論し、実際に修復にたちあい、郷陽の処女作ともいえる作品の修復に携わることで、昭和初期の人形制作技法や構造、材料、郷陽の表現の特質について詳細な調査を行うことができた。

この作品の修復完了にあわせて、一般公開のための展示を企画し、日本に里帰りしていた答礼人形3体を一同に会し同志社大学で日米友情人形交流85周年の記念行事として、答礼人形に関する展覧会『海を渡った人形大使展』を開催した。この展覧会に際し、アメリカに現存する答礼人形47体すべての作品画像を収集、画像の無いものについては新規に撮影を行なった。この調査により製作者の特定や、作風比較が可能となった。アメリカ

の各所蔵館に依頼した調査の過程で、新たな資料や所在不明であった作品も発見された。答礼人形に関する研究成果は、同志社大学で開催されたシンポジウムおよび展覧会図録で公開した。これにあわせ、画像及び作品情報をまとめたデータベースを作成し、会場にて一般に公開した。

このほか、調査の過程で郷陽の岳父・久保佐四郎に関する資料も発見され、これにより東京藝術大学が所蔵する作品が佐四郎の作であることが確認された。その詳細については、「東京藝術大学所蔵 西澤仙湖旧蔵の変わり雛について」『平成23年度 東京藝術大学美術館年報』で発表した。また、国外にある戦前期の作品の所在調査を行うなかで、郷陽の父・初代平田郷陽が生人形興行やデパートのマネキン制作のほか、横浜で欧米に輸出する生人形の制作にも携わっていたことが当時の記録から判明した。これは今後、生人形師としての平田家の活動がどのようなものであったかを明らかにする手がかりとなるであろう。

平田家資料の二年間の調査により、平田郷陽が戦前期の創作活動のなかで、生人形の技法を駆使しながら、それまでの人形の展覧会芸術としての可能性を拓いていったことを実証する多くの新知見が得られた。また、アメリカの美術館との答礼人形に関する共同調査をきっかけに、現地での作品の理解が深まり、行方不明作や新資料の発見、作品展示や研究会の開催などの企画が次々と進められており、新しい研究活動の展開にも寄与することが出来たといえる。

本研究で得られた調査・分析結果は今後整理を進め、学会誌や展覧会を通して公開していく予定である。今回の調査は作家が遺した膨大な一次資料の一部に留まったが、引き続きアーカイブ化を進め、公開を促進していくことで、今後の近代人形工芸史研究の一助としていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

1. 田中圭子「東京藝術大学所蔵 西澤仙湖旧蔵の変わり雛について」、『東京藝術大学美術館年報 平成23年度』、東京藝術大学美術館、査読無、2011年、pp. 34-36.
2. 田中圭子「作品紹介 スタール雛 (東京藝術大学所蔵)」、『人形玩具研究』23号、日本人形玩具学会、査読有、2013年、pp. 71-73.

3. 田中圭子「資料紹介『人形制作』、『人形玩具研究 23号』、日本人形玩具学会、査読有、2013年3月。pp. 57-65.
4. 田中圭子「白澤会と平田郷陽 試論」、『人形玩具研究 22号』、日本人形玩具学会、2012年、査読有、pp. 73-83.
5. 田中圭子「答礼人形の製作」、『海を渡った人形大使』、同志社大学人文社会研究所、査読無、2012年、pp. 15-19.
6. 田中圭子「森川杜園の木彫—東京藝術大学所蔵 平櫛田中コレクションより」、『人形玩具研究 22号』、日本人形玩具学会、査読有、2012年、pp. 198-202.

〔学会発表〕(計2件)

1. 田中圭子「答礼人形の製作」、同志社大学人文科学研究所『海を渡った人形大使展 シンポジウム』、於：同志社大学。2012年3月18日。
2. 田中圭子「生人形から人形芸術へ—平田郷陽の挑戦—」、佐野美術館・人形玩具学会共催『シンポジウム 平田郷陽と人形芸術運動—郷陽歿後30年・帝展人形進出75年』於：三島市民文化会館。2011年6月11日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 圭子 (TANAKA KEIKO)

東京芸術大学・大学美術館・学芸研究員

研究者番号：10571953